

京都文化博物館所蔵「誓願寺門前図屏風」の復元研究

宇城 翔子（愛知県立芸術大学大学院）

1. 研究対象作品概要

復元模写研究の対象作品である京都文化博物館所蔵「誓願寺門前図屏風」二曲一隻屏風（紙本着色、151.9 × 166.4 cm、17世紀）には洛中の東端に位置する誓願寺と、その周辺の町家、参詣する人、産業を営む人等、多くの事物が描き込まれている。近世初頭の京都の都市景観が捉えられ、三条通や寺町通をクローズアップして、誓願寺と周辺のにぎわいを表現している。人物の躍動感ある表現や、金泥で描き込まれた衣文線、豊かな表情等の細かな描写からは、都市で生活を営む人々の生命感を感じることができ、本作品の魅力となっている。

本作品は、1991年度に京都文化博物館が古美術商から購入し、古美術商以前は古美術収集家が所蔵していたようだが、伝来の詳細は不明である。岩佐派による都市図の貴重な作例であるが、現状画面は汚損や退色が激しく、制作当初の表現が損なわれた状態である。全体が黒ずみ画像が不鮮明なため、本作品の細かな観察を行うことは難しい。また本作品は、二扇で完結するものではなく、本来横方向に画面が続いていたと考えられている。何故なら、描かれている寺院は誓願寺だけでなく、誠心院や六角堂などがあり、右扇においてもその先に更に図様が續いている事を思わせる箇所が存在するからである。さらに、右扇と左扇の紙継ぎに乱れはないものの位置がわずかながら上下にずれている点や、図様が明らかに連続しない箇所が存在する点から、裁断や加筆・補筆の可能性が考えられる。先行研究でも、改装時にダメージを免れた部分によって画面の集約が行われたことが示唆されている。屏風裏面には「屏風八九 / 岩佐勝以 / 京洛風俗 / 一双之内」という貼紙があるが、先行研究では裏貼紙自体も改装後のものであり、制作当初はそれよりも更に大きな画面であった可能性が高く、ある時期に二曲一隻屏風に改装されたと考えられている。

2. 目的

本作品の魅力は人物表現の細緻な描写にあり、単なる風俗画にとどまらない豊かな表現世界を実現している。しかし、本作品の現状は、汚損や後補による裁断や乱雑な着色が目立ち、制作当初の表現が損なわれた状態である。本研究で想定した事柄をすべて実際に描く事により、左右扇の繋がりでの復元のみでなく一つの作品として汚損、欠損、裁断、変色箇所を払拭した画面状態が確認できるようになり、個々のモチーフのみならず主題や作風について迫ることを可能にする。さらには、検証した事柄を描きだしていく過程の中で、検証結果がより明確になり、描写工程の中でしか気づくことができない知見が得られると期待できる。

先行研究をふまえ、屏風の形状・紙継ぎの位置・モチーフの地理関係や描写について検証し、

文字だけでは分からない情報を視覚化する事により、不明とされる箇所を明確化を図る。そして、部分的に残る細やかな彩色や表情等をもとに、魅力的な描写箇所の存在を具現化し、描かれた当初の絵画の印象を取り戻すことにより新たな知見を得ることを目的とした。

3. 研究手法

本研究では、先行研究・参考資料・現存箇所の表現をもとに、剥落・変色箇所の復元を試み、原寸大想定復元模写を作成する。

【第一段階】

原寸大ポジフィルムを使用し、上げ写しによる現状白描画の作成を試み、先行研究で述べられている事柄と実際に画面上で見られる情報との比較を行う。それとともに、図様の抽出から読み取ることでできる欠損箇所の再確認を行う。

【第二段階】

京都文化博物館にて、原本熟覧調査による現状の絵具や描写の確認・補紙や後補彩色の確認・上げ写し作業で出てきた疑問点の確認・表装形態の調査・現在の誓願寺や街の変化の確認を行う。

さらに、画面のズレや歪みの修正案、および絵具の色や絵具下の制作当初の線描を割り出すために赤外線撮影を行う。赤外線と可視光画像データを見比べて線描であろうものをすべて抽出し、その中から構図上制作当初の線描と想定できるものを選別し復元案を作成する。建物や空間の認識が困難なところは、類似する箇所の角度や長さの計測、様々な類似本と対比させた数パターンの中から、画面上に無理なく合致するものを選択することで決定していく。主に考察した部分を下記に示す。

- ・塗り重ねや、不自然な逆パースになっている部分。
- ・類似本（主に舟木本「洛中洛外図屏風」）の衣文線の様子や、人物描写の画面端部の切れ方との比較。
- ・道幅と空間の検討及び、群衆の画面分布。
- ・様々な洛中洛外図屏風の屋根の形状や誓願寺の敷地の広さの比較。

【第三段階】

第一・二段階の検証から、後補線・制作当初線・補紙の分別を行う。そして、先行研究における問題点のすり合わせや、岩佐派作例と同年代の類似作例の参照から構図の検討を統合し、図様の復元を試み復元白描画を作成する。特に人物復元における線描剥落箇所の復元は、岩佐又兵衛作の人物表現を参考に、独特な人物の躍動感を考察して行う。

【第四段階】

「各モチーフと欠損箇所の検証」から導き出した結果と、二度目の熟覧調査の赤外線画像データを基に、復元白描画を下図として完成させる。人物と建物と樹木の複雑な重なりを個々に復元したうえで調整し復元図を作成するため、透過性の良い製図用コート紙を使用する [図1]。

【第五段階】

第四段階で作成した下図を、紙の継ぎ目や左右扇が繋がるように雁皮紙の上に配置し、転写を行う。転写した線を墨線で描き起こして彩色前の下描きとする [図2]。

【第六段階】

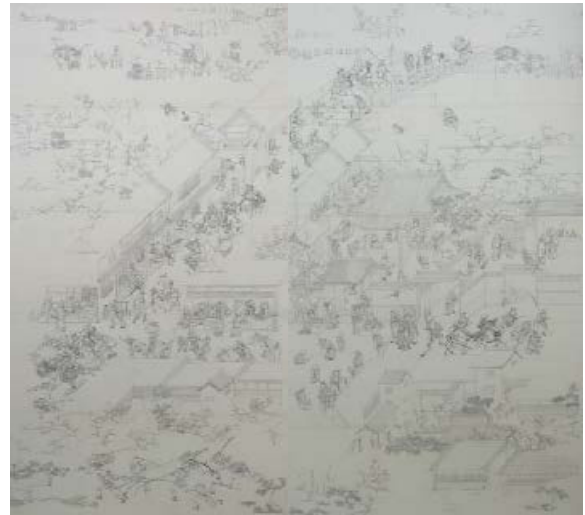
先行研究の顔料成分調査や手板から彩色の想定を行い、図様の剥落や変色部周囲の現存している部分から制作当初の彩色を考察する。復元白描画作成時と同様に、同時代の洛中洛外図や又兵衛工房による類似作例の彩色を手がかりに進め、制作当初の線描、彩色想定復元模写の完成を目指す [図3・4]。

【第七段階】

現状の表装に使用されている慶長小袖柄の裂が画面に与えている影響は大きいと考察する。改変の際にこのような文様の小袖裂を周囲に施す形態にした事には理由があったと推測する。現在の裂を施した理由の解説に繋げるため、本研究の復元模写にも原本の形態に近い装潢を施す。



【図1】「誓願寺門前図屏風」想定復元白描画に樹木復元図を重ねた下図



【図2】本紙への転写後、墨線により描き起こした図



【図3】彩色途中段階の図



【図4】《京都文化博物館所蔵「誓願寺門前図屏風」想定復元模写》、雁皮紙、170.9cm×188.0cm

4. 結論

(1) 地理的整合性の復元

本研究では、熟覧調査による赤外線画像から建物の明らかな後補が認められる事がわかった。さらに、類似作例との比較、現存箇所線の切れや屋根のゆがみの修正、後補描写の除去、欠損箇所の復元考察の結果から、欠損範囲を推測することができ、二扇が連続する一画面であったとし復元案を作成した。

図様の復元から、原本の制作当初には両扇が違和感なく繋がった絵であった事や、先行研究では画面下部は貼り足しとされるが当初の紙が残った後補であった事、画面右側にもう一隻分の絵が存在していた事の可能性が強まった。

復元白描画の作成からは、原本の汚損や後補による裁断、乱雑な着色を取り除いた線を蘇らせる事ができ、見えづらくなっていた図様を各所のモチーフとして捉えることが可能となった。

人物、樹木、河川、金雲の再現と建物の整然さを蘇らせた彩色を施した想定復元模写の作成からは、様々な人物の特徴を豊かに捉えた描法と装飾性、構図や出現モチーフへのこだわりを兼ね備えた岩佐派作品や、他の桃山時代の風俗画にひけを取らない屏風として再認識することができた。

金泥雲で飾った想定復元模写から、鴨川の遠景、三条通の接続、寺町通の接続、六角通の存在を視覚的に読み取ることが可能となり、金雲で囲むように場面として人々の営みを描く箇所を除けば、誓願寺周辺の歪みのないきちんとした町の描写を認識でき、地理的整合性を保った作品であることが明確化した。

(2) 復元図から想定される景観年代

復元案考察時に行った、様々な洛中洛外図における同モチーフの描写との比較検証から、本作品は江戸時代初期の1615～1624年の間の事物を描いたものと判断できた。岩佐又兵衛の生涯は1578～1650年であり、1615～1624年の間の事物を描いた本作品に、又兵衛自身も携わることが可能であった事が推測できる。

(3) 本作品の主題

制作当初の地図や資料でも誓願寺の近くに扇屋を確認することは出来ないが、誓願寺敷地内の人物や周辺にも多数の扇を持っている人物があえて描かれていることや、限られた画面の中で扇塚を大きく描いていることは密接に関係していると予想した。江戸時代には「扇屋軒先図」(大阪市立美術館蔵)のように女性が店先で仕事をする様子を描いたものが数多く存在する。これらは当時「職人尽くし絵」の要素を取り入れた風俗画として描かれ、女性を描いた絵画としての需要もあったと推測でき、本作品左扇に描かれる扇屋もそのような意味合いを含んでいると考えられる。加えて、誓願寺が芸能を業とするの者たちが参詣する場所であり、扇を祀る寺であったことから、これらの事物は誓願寺の説明として描かれたと考える。扇屋の他にも本作品の誓願寺周辺には、扇や芸能に関わる人物が描かれている。さらに誓願寺や誠心院には女性に関わる信仰があり、本作品では女性の成長や生活の様子を諸処で表現していると考察する。

よって、誓願寺の特徴を説明するものとして誓願寺を中心に散りばめるように描かれている関連モチーフが画面大半を占めているため、誓願寺を描くための作品であった可能性が高い。さらには、この事実から本作品の構図とモチーフは絵師と注文主との綿密な構想によって導き出されたものであったと推測できる。

また、鴨川の景色や三条寺町全体に桜梅が描かれていることが明らかになったことから、本作品が貼紙通り「一双のうちの一雙」の二曲一双屏風で、洛中洛外図と同様の性格が認められる場合、一般的な洛中洛外図屏風が右から左へ四季の風物・風俗を配置しているように、もう一雙には他の季節が描かれていた可能性が推測できた。

5. 総括

本研究では左右扇のみで完結として復元したが、実際に復元することにより図様が読み取り易くなり、下記に示すような他扇が存在した可能性が考えられる事となった。

- ・可能性①：右扇中央部の誓願寺前の右に向かう人の集団描写箇所から、右側にも更なる画面を想像できる。
- ・可能性②：四季の移り変わりを考えると春景図のように春と秋の季節を描いたものならば、左隻の存在が考えられる。
- ・可能性③：魚を捉える場面の鴨川描写からは、夏と春を描いた画面の可能性も考えられる。
- ・可能性④：左扇下の喧嘩の場面の地面を、舟木本や「豊国祭礼図屏風」などにも見られる緑青土坡表現とする事で、当時の地理的に画面下に存在した森の存在も考える事ができ、下に続く他面の存在が想定できる。

そして、本作品と同時期作と考えられる岩佐又兵衛作「洛中洛外図屏風」（東京国立博物館所蔵、以下、舟木本）や「豊国祭礼図屏風」（徳川美術館所蔵）との比較検証からは、人物やモチーフを個々に抽出する事で類似箇所の存在を確認する事ができた。画面で目を引く「かぶきもの」の描写の類似性のみでなく、舟木本の誓願寺付近の建物の構成との類似性、「豊国祭礼図屏風」の構図及び出現モチーフとの類似性が各所に確認できた。

さらには、1615~1624年の間は又兵衛が福井で活躍した時代（1617~1637年）と重なり、制作者は舟木本を描いた又兵衛京都時代の工房の可能性、「豊国祭礼図屏風」を描いた又兵衛福井時代の可能性が想定できた。以上のことから、又兵衛自身の本作品への関与の可能性が深まり、これらの作品に携わった絵師が本作品の制作に関わった事が有力となった。

このたびの想定復元模写では、躍動感ある人物表現に対し、整然とした建物描写を復元したことが画面にメリハリを与え、独特な人物をより際立たせるものとなったと実感している。植物表現もこれにならって類似資料同様に、整然さを持った彩色を施すことにより、人物の表現に目がいきやすくなった。以上のように、左右扇の図様の繋がりが復元できただけでなく、作品が持つ本来の魅力を引き出すことができた実感している。